

することも、また人や社会の進むべき方向性を示唆することも、残念ながらできずに来たのである。

人や物は他との関係において捉えるとき、そのものの輪郭は明確となる。個別な事象がもつ関係性を明らかにし、それがどのように推移して行ったのか、という点を明らかにすることが、歴史研究にとってもっとも大事なことである。

その意味では、第六版の第一刷となる本書は、まず序章で「看護史の意義」「なぜ看護史を学ぶか」「看護教育における看護史の位置づけ」の項を掲げ、「歴史を学ぶこと」が「現在を学ぶこと」になる点を高らかにうたい上げ、終章では歴史を踏まえた上で、慢性病時代における新しい看護のあり方を模索する姿勢を示していることは、旧版にない新鮮さと看護史の新たな構築に対する意気込みとが感じられる。

細部について検討を加える余裕がないので、旧版との比較で言えば、まず第三章では仏教・儒教・道教・神道の考え、ケガレの思想や死後についての見方に関する節を新たに登場させている。ターミナルケアや臓器移植の問題に関連して、日本人の生死観・医療観といったものへの理解を深めさせる配慮である。

また、第七章では旧版のアメリカに加えて、現代のイギリス・中国・韓国の看護に関する項が立てられている。他国との比較によって、日本の看護の輪郭が一層明瞭になるとともに、たとえば韓国の看護大学に一九九二年現在で、二十五の修士課程、十一の博士課程があるといった記述などは、われ

われの目を隣国にも向かわせ、もっと知りたいという気をおこさせる。

そのほか、巻末の充実した参考文献の一覧も後学に資益するところが大きい。

(新村 拓)

〔医学書院・東京都文京区本郷五―二四―三、電話〇三―三八一七―五六〇〇、一九九六年、B5判、二五四頁、二〇六〇円〕

新村 拓著『出産と生殖観の歴史』

著者によるこの本のタイトルをみたときに「これについて人間の生老病死の全部をテーマにされた」と感じた。著者にはこれまで同じ法政大学出版局から「死と病と看護の社会史」、「老いと看取りの社会史」、「ホスピスと老人介護の歴史」の三冊が出版されており、人間の生まれるところだけがないのはそれだけ取り上げるのがむずかしいからなのかと感じていたところであった。

事実本書を書くにあたって参考としている各章ごとの史・資料をみると苦心のほどがうかがわれる内容となっている。

医学史（特に産婦人科学史）はもとより日本史、女性史、宗教史、思想史、技術史、生命倫理、法律、政治、民俗学、文学、人口問題、教育、母性、子供、性などの幅広い知識がないとテーマとして取り上げることのできない領域であることがわかる。人間の出生はこれだけの要素がかかわるくらい複雑で

多次元のテーマであることがわかる。それだけに内容が盛りだくさんになってしまふ傾向になるのはやむを得ないことかもしれない。

本書は大きく三部から構成されている。第一部は「生殖の理論」で、第一章生殖の理論と身体観、第二章胎児観と発生論の図像となっている。第二部は「妊娠から出産へ」となっており、七章からの構成で第一章月経観、第二章懐妊、第三章易産を求めた古代・中世人の心性、第四章産死者の腑分け、第五章近世出産の心得、第六章出産の情景、第七章産婆を批判する産科医となっている。第三部は「子を産むことの意味」で六章からなり、第一章結婚、第二章子を産み育てることの意味、第三章受胎調節と出産管理、第四章障害児の出生、第五章男児待望の社会と性別判定、第六章生殖と性愛となっている。そして最後に付論として「生殖観の歴史」が載せられている。これは近畿地区助産婦学校合同特別講演会での講演録（平成五年度）である。著者も後書きで述べているが、この付論が本書の要約となっているので、まずこのところを目をとおしてから第一部に入ってもよいと思われる。

本書は性愛・受胎・出産を、仏教や東洋医学をはじめ、日本古来の医書や安藤昌益らの思想家はどうみてきたか。生死を分けかねない出産の情景はどのようなものだったか。子は「授かるもの」から「つくるもの」へという意識の大きな変換の中で、避妊や墮胎、胎教や出産の心得、助産者の役割、不妊等々について人々はどうか考え、どう対処してきたか。近

代国家による性と人口の管理、性行為と生殖の分離をもたらす現代の生殖技術の発展までを展望し、子を産むことの意味と知恵を歴史に学ぶという内容になっている。

まず本書を読んで感心したのは妊娠・出産に対する「人間の対処行動」が科学的知識の十分ではない時代においても合理的になされていることである。江戸時代の避妊法についてはじめて知った。また江戸の女医者の存在も知ることができた。さらに人体に関する知識を神仏から解放した解剖学の果たした役割についても認識を新たにしたい。最近話題となっている助産士について著者は賛成の立場をとり希望する男性がでてきた場合には資格を得る道を解放しておくべきだとしている。その理由として父親を出産・育児の場に引き込み積極的にかわらせることを助産士の働きに期待できること、男性の立場からアドバイスできる助産士の登場は助産の職域の拡大・活性化にもつながるとしている。

書物のタイトルは著者の問題意識の表れとみることもできるわけだが、歴史をとらえる視点にはその人の人間としての生き方が表れてくるものである。著者の家族との生活、親としての自己の生き方が歴史をみる問題意識となっていると感じられた。

（平尾 真智子）

〔法政大学出版会・東京都新宿区市谷田町二一四一、電話〇三二五二八六二七一、一九九六年、四六判、三二五頁、二九八七円〕